SD トークセッション　＜伊藤哲郎アンケート＞

質問１　「スペースデザインとは」
あなたが思う新制作のスペースデザイン（部）とは何ですか？その魅力はどこにありますか？

アカデミックな絵画や彫刻ではない、また工芸でもない領域の創作活動による作品を持ち寄った展覧会。会場や展示方法の制約から、一定の留まった質量が要求される。何が出てくるか分からないところが魅力かな？

質問２　「テーマ」
あなたの作品（または創作）のテーマや特徴は？

日常生活や仕事の中で出会った素材(製品や部品など)を、本来の役割や機能から離れたその物自体の表情・表現の可能性を模索するような作品が多かったと思う。ストッキングやウレタン生地・モルタルとビニールなど、もともと形のない素材が重力や外力に反応し、徐々に形を変えながら艶いたフォルムをもちだす瞬間がありました。コンクリートの下水桝が何か呟き出した時もありました。

質問３　「素材と技法」
素材と技法についてのこれまでの工夫などを簡単に教えてください。

4,5 年毎に扱う素材が変わってきたので、職人技的な技能の蓄積は無いように思います。それぞれの素材によって、フォルムが生まれるための仕掛けやそれを定着させるための技法・工法はまちまちですが、最初に持てたビジョン(期待感)みたいなものに向かって、考え悩み試行して一歩ずつ近付いて行くプロセスは似たものかと思います。また、最近の私の作品の場合は重かったり壊れやすかったりするものですから、美術館へ運搬・陳列するための工夫もなかなかのものです。

質問４　「空間表現」
美術館の展示空間に作品を表現する際に特に意識することは何ですか？
また、これまで経験した都美術館と新美術館に対する意識の違いはありますか？

空間スケールが製作時と展示時であまりに違いますので、ふた周りくらい大きめの製作を意識していますが、人体スケールがやはり基本かな、素材感・質感の充実も重要なようです。美術館の比較についてですが、都美術館のSD 部の展示スペースは、空間の大小や光の抑揚、内装材に変化があり、外とも中ともつかないような空間構成で魅力的なものでしたが、新美術館では均質空間となり、とりわけ光に厚みがなくて素材が引き立たないように感じます。立体展示には不向きな場所かもしれません。

質問５　「イメージの源泉」
あなたの創作イメージの源泉は何ですか？（複数可）
特に影響を受けたモノ・コト・ヒトなどがありましたら教えてください。

「SD 通信/イメージの源泉」で披露させてもらいましたが、最近は古いものや風化したもの・過去を引きずったものに惹かれます。社会状況の変化から置き去りにされて行く自己を意識してか、時間の堆積や人の意識の変遷が見て取れるものに愛おしさを感じます。

質問６　「ターニングポイント」
これまでの創作活動（創作テーマ）の変遷やターニングポイントについて教えてください。

最初の 8 年間は合板積層の作品、図面と模型で計画しひたすら木工作業を重ねる形で制作していました。1988 年にストッキングを扱い出して制作のプロセスが激変し、素材の生み出すフォルムの可能性みたいなものに関心が移行。実物に触り、重みや温度や柔らかさを感じながら外力を作用させるといった即物的な制作プロセスが多くなりました。

質問７　「エピソード」
これまでのエピソードを幾つか教えてください。
（SD との出会い、応募のきっかけ、初期作品について、失敗談など）

大学時代の恩師(森史夫先生)の設計事務所に転がり込んでから、先生の作品模型を作りつつ自分の作品も作るようになりました。失敗談では 1990 年台の中頃だったか、自宅の一室に 2m 四方の仮設ブースを構え、ポリエステル樹脂の吹付作業をしたことがありました。とんでもない悪臭と樹脂のベタベタが拡散し、家族の非難は格別でした。吸い込んだ樹脂が身体の何処かで悪さをしてるかもしれません。

質問８　「メッセージ」
創作活動をされている方々（または出品を目指す人たち）に向けた情報として、ご自身が関心を持っている現代のデザインや美術の作家や作品を挙げてください。併せてそのような方々に向けて何かメッセージをお願いします。

AI による知の集積が進みデジタル化により様々な領域が進化・再構築される中で、美術・デザインの世界でもシステマティックにプログラミングされた作品が現れてきます。所詮、ヴァーチャルだからと言って軽視できない偶然性やシンパシーまでもプログラミングされたものが出現するかもしれません。かみさんの買物に付き合ったスーパーで、たまたま見掛けたはち切れそうな若いトマトに心を動かされたりもしますが----。

質問９　「ビジョン」
あなた自身のこれからのビジョンと SD 部の今後の展望をお聞かせください。

個人的には、「これから」がそんなに永くないかもしれませんが、素材や事象への感受性・創作意欲が続く限り制作し続けると思います。SD 部については、当初、建築部から派生してきた経緯があり、また部の特異性や展示会場の構成上の演出から、共同制作による大きな空間作品みたいなものが実現できると良いなと----。